

新学習指導要領がスタートした2022年度、学校現場には資質・能力を育成するための指導と評価を積み重ねながら、より自校に合った形へと軌道修正していくことが求められる。現場が直面する課題や疑問を解決し、よりよい計画・実践につながる情報を提供する。

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

テーマ

観点別学習状況の評価の 実践と軌道修正

実践レポート

新課程の指導と評価の充実に向けて、
今年度も様々な事例や情報を発信

22年度からの観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の実施に向けて、これまで本コーナーでは、主に「3観点をどのように評価すればよいか」「観点別評価と評定をどのようにひもづければよいか」といった点を、先進事例を基に解説してきた。3観点的評価のうち、「知識・技能」「思考・判断・表現」については、校内

テストで観点別に出題・採点をすること、「主体的に学習に取り組む態度」については、自己評価を活用することで評価を行う予定の学校が多かった。評定換算については、教育委員会の規定や各校で育成したい資質・能力を踏まえて、3観点到重みづけを「するパターン」と「しないパターン」に大別できる。各校は、今後もある生徒の実態を見ながら、指導と評価の軌道修正が求められる。新学習指導要領での指導と評価の充実に向けて、今年度も本コーナーでは、先進事例を紹介していく。

2年間の試行を通して明らかになった
観点別評価の実践ポイントと可能性

大阪府立鳳高校

2020年度から観点別評価の試行に取り組んできた大阪府立鳳高校。大阪府立高校では、観点別評価を評定に総括する際、3観点的重みを均等に扱うため、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価の研究が重要なテーマとなった。2年間の試行から、各校が今後直面するであろう課題と解決の方策を考える。

設立 1922(大正11)年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約280人
2021年度入試合格実績(現役のみ)
国公立大は、大阪教育大、神戸大、和歌山大、
大阪市立大、大阪府立大などに53人が合格。
私立大は、同志社大、立命館大、関西大、
関西学院大などに延べ920人が合格。

思考・判断・表現の評価

生徒の成果物を見ながら、
ルーブリックを練り直す

「思考・判断・表現」の評価において、同校の教師たちが直面し

た課題は、パフォーマンス課題のルーブリックと、生徒の成果物の

ミスマッチだった。地学担当の折橋将司先生は、21年度1学期のパフォーマンス課題での生徒の成果物をルーブリックと照らし合わせ
る中で、B評価には達していないけれども、A評価の基準の一部を

図1 「思考・判断・表現」を測るルーブリックの改善

A：十分に満足できる B：概ね満足できる C：Bに達しない

① 地学（「地球の大きさを測定しよう」）

◎当初の評価基準

A	B	C
<ul style="list-style-type: none"> エラトステネスの方法とGPSの値を用いて地球の大きさを測定し、より正確に測定する方法を的確に考えることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> エラトステネスの方法とGPSの値を用いて地球の大きさを測定できる。 	<ul style="list-style-type: none"> Bの基準を満たしていない。

◎新しく作成した評価基準

A	B	C
<ul style="list-style-type: none"> エラトステネスの方法とGPSの値を用いて地球の大きさを測定し、より正確に測定する方法を的確に考えることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> エラトステネスの方法とGPSの値を用いて地球の大きさを測定し、より正確に測定する方法を考えるとできている。 	<ul style="list-style-type: none"> Bの基準を満たしていない。

改定前のルーブリックでは、B評価となった生徒の中に「地球の大きさを測定できる」は満たしていないが、「より正確に測定する方法を考えるとできている」者が見られ、評価の連続性に欠けていた。そこで、改定後のルーブリックでは、B基準として「考えることができている」、A基準として「的確に考えることができている」とし、考えの妥当性の有無で評価の連続性を持たせた。

※学校資料を基に編集部で作成。

満たしているといった状況が発生していることに気がついた。「ルーブリックのA評価とB評価で、異なる点を見る記述語になつていたので。そこで、集めた成果物を見ながら、同僚とともに改めてルーブリックを作成し直しました(図1)」

国語科の岩尾淳未先生も、当初のルーブリックを作成し直した。

「生徒の解答には、教師の想定を超えたものもあり、当初のルーブリックでは評価は困難だと感じました。そこで、同じ学年を担当する国語科の教師が成果物をざっと読み、互いの気づきなどを持ち寄って、ルーブリックの練り直しを行った上で、各教師が担当クラスの結果物を詳細に評価する流れにしました」

地歴・公民科の藤田真緒先生は、生徒の納得度を高めるためにルーブリックの到達基準を細かく設定したことで、評価がしにくくなつてしまったことがあるという。

「各段階で満たすべき基準を細かく挙げて評価に臨んだところ、高く評価したい成果物が低い評価となつてしまったことがあります。細かくポイントを設定しすぎるよりも、大きなポイントを提示した方が本来の評価の目的を達成できると思いました」

もちろん、ルーブリックの記述語が大まかなものと、教師間で評価のズレが生まれかねない。ルーブリックの記述語の具体性は、実践と軌道修正を重ねることをつかむのが一番の近道だと、折

橋先生は考える。

「本校は、20年度から観点別評価の試行に取り組んでいます。21年度は20年度の試行を生かしたことで、ルーブリックの精度も上がり、評価の負担も大きく軽減しました。私たちが経験を積み、生徒の成果物を見通すことができるようになったからだと思います」

「生徒の成果物を基にルーブリックを見直す工程を2、3回経験すると、ほかの単元でもブレの少ないルーブリックを作成できるようになります。やはり最初は修正が発生します。教師が評価を負担に感じないように、パフォーマンス課題と定期考査の時期をずらすなど、年間の評価計画を工夫することが必要です」(岩尾先生)

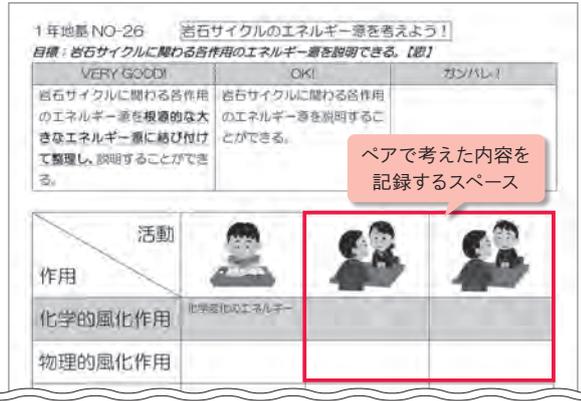
主体的に学習に取り組む態度の評価

2つの観点の評価を同時に見取ることができるパフォーマンス課題をつくる

20年度の同校では、「主体的に学習に取り組む態度」の観点につ

いては、生徒が作成する「振り返りシート」を基に評価した。だが、

図2 2つの観点で学力を測るワークシート



※学校資料をそのまま掲載。

「評価に差が生まれにくい」「授業の最後の10分間で作成したシートを基に評価してよいのか」といった声が上がった。

『主体的に学習に取り組む態度』は、粘り強さと学びの自己調整という2つの側面で評価されるものですから、『振り返りシート』の記述だけで評価するのは困難だと考えました。そこで21年度は、単元の中に、他者の意見を踏まえて自分の意見を練り直すグループワークや、単元全体を通して身につけた力を発揮させるパフォーマンス

ンス課題を取り入れることで、『思考・判断・表現』と『主体的に学習に取り組む態度』の2つの観点を、1つの成果物を基に評価することにしました（折橋先生）

例えば、地学のパフォーマンス課題は「思考・判断・表現」を評価するために20年度に作成したもので、生徒が1人で取り組むものだった。しかし21年度は、ペアで考える過程を2回組み込み、「思考・判断・表現」とともに粘り強さや自己調整する力を測るように工夫した（図2）。

「思考・判断・表現」を測るパフォーマンス課題で「主体的に学習に取り組む態度」も見取る同校の取り組みは、22年度も続けて行われる予定だ。藤田先生は、「生徒との評価基準の共有」がますます重要になると考えている。

「生徒の中には、『主体的に学習に取り組む態度』の評価を『前向きなことをたくさん書けばA』『文字数が少ないとC』と、大ざっぱにしか捉えられていない者もいます。評価が終わったワークシートを返却する際には、B評価とA評

価の記述語を見せながら、『今後のことを具体的に書いている』『押さえてほしいキーワードが入っている』などの違いを確認しながら、B評価の生徒には、『ここをもっと詳しく書けばAだよ』などと気づきを促すことが重要だと思っています。実際、意欲のある生徒は、私の指摘を踏まえて自発的にワークシートを修正しています」

「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の2つの観点の評価を担うという点でも、パフォーマンス課題の重要性はますます高くなるが、折橋先生は、パフォーマンス課題への取り組みをよりよいものとするためにも、授業で出題する小テストを活用した形成的評価を充実させている。

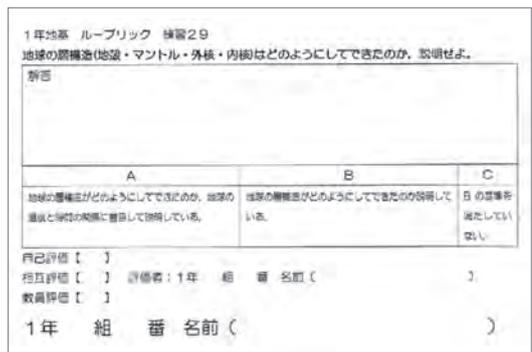
「15分程度で取り組める小さなパフォーマンス課題（図3）をルーブリックとともに生徒に与えます。解答作成と自己評価に必要な時間は5分程度で、その後、席が近くの生徒同士で相互に『なぜその成果物がその評価なのか』を伝え合う時間を取っています」

形成的評価として実施している

ため、生徒の相互評価で終わることもよくあるが、回収した成果物に目を通すことで、より大きな課題を与えた時に生徒がどのように答えるのが予測できるようになり、ルーブリックの練り直しに役立つという。

「生徒も、パフォーマンス課題ではどんな成果物がA評価になるか、見通すことができるようです。こうした小テストなどを材料に、パフォーマンス課題や定期考査の機会に教科団で生徒の状況を確認し、ルーブリックを軌道修正していきたいと思います」（折橋先生）

図3 形成的評価のための小テスト



※学校資料をそのまま掲載。

22年度の展望と課題

学びの目的と評価の根拠を 生徒にしつかりと伝えていく

田中肇校長は、異なる評価手法を有機的に連係させることの重要性を指摘する。

『振り返りシート』は単体の評価材料とするよりも、ほかの評価材料と組み合わせることで、その真価を発揮するのだと私は考えています。例えば、パフォーマンス課題の評価に際して、『振り返りシート』も併せて見ること、教師は『生徒がパフォーマンス課題に取り組み中で、どのような思考の変遷を経て、ここまでの思索

にたどり着けたのか』についても見取ることができ、結果として、『思考・判断・表現』だけでなく、『主体的に学習に取り組む態度』も評価できるようになると思います」

端村誠教頭は、今後は評価の根拠を説明する力が、教師にますます求められると話す。

『思考・判断・表現』『主体的



教頭 端村 誠
はしむら・まこと
教職歴26年。同校に赴任して4年目。



校長 田中 肇
たなか・はじめ
教職歴34年。同校に赴任して2年目。



生活指導部 藤田真緒
ふじた・まお
教職歴2年。同校に赴任して2年目。地歴・公民科。



自治会部 岩尾淳未
いわお・あつみ
教職歴2年。同校に赴任して2年目。国語科。



教務主任 折橋将司
おりはら・まさし
教職歴5年。同校に赴任して5年目。理科。

※プロフィールは、2022年3月時点のものです。

に学習に取り組む態度』の評価の根拠を、単元の目標に準拠しながら説明することで、生徒の授業理解が一層深まり、評価への納得度も高まります。同様に、『知識・技能』においても、それが何を追究するために必要な知識なのか、授業で説明していくことも重要になるでしょう」

生徒への授業アンケートの結果から、パフォーマンス課題やそれを軸にした授業の満足度が高いことも明らかになった。また、一部の教科で定期考査の結果を分析したところ、パフォーマンス課題の中で扱った知識・技能を測る問題の正答率は圧倒的に高かったことも分かっている。

「パフォーマンス課題に意欲的に取り組むことで、知識・技能も定着します。観点別評価に伴う授業改善は、大学入試で求められる学力も保障するものであるとともに、社会に出た後も必要とされる力の習得に資するものであると感じています」(田中校長)

—学び続ける生徒の育成に向けて— 新課程における教育実践と深化

第1回テーマ 先進校の実践から考える観点別評価の実践と見通し

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/seminar/2022/article/20220511_shinkatei/

大阪府立鳳高校の取り組みに加え、全国の先進校の学習評価の実践を紹介しています。5/11に公開予定ですので、ぜひご覧ください。ハイスクールオンライントップページ>新課程>指導と学習評価 よりチェック!

新課程に関する情報は、『ハイスクールオンライン』でお届けします!

- 新教育課程の参考になる先進事例
- 過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料 などを掲載!

新課程レポート

『ハイスクールオンライン』トップページ>新課程からアクセス

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/shidou/index.html